

平成 28 年度日本海学研究グループ支援 報告書

環日本海地域の高岡銅器 文化資源学の視点による研究
海を渡る鉄瓶 文化的意味に着目して

平成 29 年 3 月 31 日

小竹 望

目次

1. はじめに	2
研究の背景と目的	2
研究の方法	2
用語の取扱い、仮名遣い	3
2. 日本における鉄瓶	3
鉄瓶の登場 茶の湯との関係	3
日用品としての鉄瓶	3
代替品の出現 鉄瓶は再び茶道具へ	4
まとめ	5
3. 中国の喫茶文化	5
現代の喫茶文化	5
歴史	6
茶芸	7
茶芸師	8
まとめ	8
4. 鉄瓶の文化的意味	9
文献目録	11
写真	12

1. はじめに

研究の背景と目的

本研究では、高岡銅器の一つである鉄瓶の文化的意味の変遷を論じる。近年、鉄瓶が環日本海地域を含む海外で人気であるという。富山県高岡市内で鉄瓶の製造を行う会社では、この数年中華圏からの注文が増え、時に製造工程の確認のためかバイヤー自身が来る場合もあるそうだ。また、高岡市内に鉄瓶を扱う新しい店舗ができるなどの動きも見られる。

高岡銅器が輸出製品を増大させた時期は過去に二度ある。最初は明治期、国の殖産興業政策で精緻な工芸品として万国博覧会などに出展し、輸出を行った。二度目は第二次世界大戦後の時期で、主にアメリカに向けてキャンドルスティック、ファイアスクリーン、クリスマス用エンゼルチャイム、暖炉部品などを販売した [養田 実 定塚 武敏, 1988]。このような動きは経済活動として取り上げられることが多く、輸出された物品がどのように受容されているかが論じられることは少ない。特に環日本海地域は、歴史的には日本に技術や文明をもたらす世界の入口であり、近世以降は文化、経済、政治などあらゆる面で相互に影響しあっているために、その差異に着目する研究は多くない。本稿で取り上げる Ke、陸らは、茶文化研究の視点から中国、台湾と日本の差異、影響について論じている。

本稿では鉄瓶に着目することで、環日本海地域の歴史的、文化的な結びつきと共通性、そして差異を明らかにすることを試みる。鉄瓶は日本で生まれた湯を沸かす道具であるが、その製造方法である鑄造技術は、7世紀頃に大陸から日本に伝わったものである。鉄瓶の主な用途である喫茶の習慣や茶葉を採る茶の木もまた、9世紀頃に中国からもたらされて和様化し、今では日本文化の代名詞ともなっている「茶道」を生んだ。中国からもたらされた技術と文化から生まれた鉄瓶が、現代中国文化においてどのような意味を持つのかを論じることで、中国喫茶文化の一端を示すことができると考える。第2節では、日本における鉄瓶の登場から現代までの変化を確認する。第3節では中国での喫茶文化の歴史、受容、変化を示し、特に「茶芸」の概念を確認する。そして最後に鉄瓶の意味を論じ、全体の議論をまとめる。

研究の方法

文献調査、インタビュー調査を行う。高岡では職人、作家、問屋へインタビ

ューを行う。環日本海地域調査は、上海にて、国際見本市を訪問し、高岡銅器取り扱い店、茶関係者へのインタビューを行う。

用語の取扱い、仮名遣い

・ 喫茶

本稿の中で論じる関係地域である中国、台湾、日本における「茶を飲む」行為を指し、「喫茶習慣」「喫茶文化」のように用いる。茶道など、茶を媒介とした社交や文化などを含む。中国、台湾の文章では、「飲茶」の語を用いたり、近世以前の事柄についても「茶芸」の語を用いたりしているが、混同を避けるため「喫茶」の語を用いる。

旧仮名遣い、台湾語は、引用文献の記載に従う。本文中では、例えば「鐵瓶」は「鉄瓶」、「茶藝」は「茶芸」のように、新仮名遣いに統一する。

2. 日本における鉄瓶

鉄瓶の登場 茶の湯との関係

日本に鉄瓶が登場したのは、江戸後期天保期（1830～1844年）頃で、茶の湯の釜の派生品であるとされている。茶の湯釜は建仁年間（1201～1202年）に作られた芦屋釜（現在の福岡県）が端緒とされ、茶道の隆盛とともに天正期（15年）には京都に三条釜座が作られ、中心的産地となった【中野俊雄, 2005】。一方鉄瓶は、釜と同時期から「手取釜」の名で存在したが、用途は薬用で、注ぎ口と半円状の取っ手の他、三つ足が付いていた。「鉄瓶」の名称の初出は天保期で、「茶道筌蹄」¹に「表千家九世の了々斎（1775-1825）の好みで二代目佐兵衛がはじめて鐵瓶を作った」とあるという【香取秀眞, 1935】。茶道表千家の要望で作られたこの時から、鉄瓶は茶道用途のものとなったといえる。

日用品としての鉄瓶

茶の湯の道具として考案された鉄瓶は、徐々に日常生活にも用いられるようになった。江戸中期から明治初期にかけて作られた草双紙には挿絵が描かれており、当時の庶民生活を知る資料となる。当時の喫茶文化を研究する吉野によると、庶民は茶を煮出す茶釜、茶釜にヤカンを乗せる「湯気薬缶」、土瓶、急須

¹ 茶道の総合解説書。文化十三年(1816)稲垣休叟の著。五巻より成る。

などを用いており、「台所で煎じた茶汁を茶碗に汲んで出すという形から、土瓶や急須の普及により、土瓶や急須に茶を入れて客までに持ち出すという形が1800年前後から増えて」来た【吉野, 2013】。この変化には、茶葉の処理の変化による茶の淹れ方の変化や、長火鉢に炭を入れ常に居室に火がある状態になったことなどが関係していると思われる。台所で大量に湯を沸かす釜と平行して、居室で茶を淹れる量だけの湯を沸かす鉄瓶が用いられ始めたのだろう。

このように鉄瓶を日常的に用いる生活は、明治、大正、昭和期まで続く。『伯樂 澁澤翁』は、江戸末期から大正初期にかけて、武士、官僚、実業家として活躍し、「日本資本主義の父」ともいわれる澁澤栄一について書いた書である。澁澤翁の人となりを表す多くのエピソードの中に、大正6年に東京市長に推された際の逸話がある。そこで澁澤が推挙を断る発言が挙げられている。

…澁澤は今は骨董品だ。骨董品は一日はおろか二十日が一ヶ月でも無いとて直接の生活には関係がない。今東京市で必要なものは床の間の飾りものよりも臺所の鐵瓶である。これはなくてはならぬものである。飾りものの市長より必要欠くべからざる實用向の市長を選ぶ事だ。
(p68)

「床の間の飾りもの」や「骨董品」と「台所の鉄瓶」が比較されており、大正6年当時、鉄瓶が生活に必須の日用品であった事が分かる。

代替品の出現 鉄瓶は再び茶道具へ

同時期の 大正9年、鉄器産地である南部（現在の岩手県盛岡市）で共進会を開催して 鑄金、茶道の大家を審査員として批評を受けたところ、「その講評で「作品には奇抜なものが多くて茶道に向かないので茶道を学べ」と言われたという【中野俊雄, 2005】。当時の鉄瓶は、日用品であると同時に茶道の道具であり、茶道具としては一定の「あり方」や「美の基準」が存在したことが伺える。

高岡では第二次世界大戦後の昭和20年代にアルミニウムを原料とした鑄物生活用品の製造を開始した。これは高岡が空襲にあわず鑄造設備が残っていたことに加え、軍需産業用途のアルミニウムが多く備蓄されていたためである。主な製造品は鍋、釜、火鉢、瓶掛などで、後にはヤカンも加わった【養田 実 定塚 武敏, 1988】。「鍋釜景気」と呼ばれるこの時期はわずか数年であったが、この時期の技術蓄積が後のアルミサッシ産業などに結びついた。この変化により、日用品としての鉄瓶はアルマイト製のヤカンに代替されることとなった。現在

高岡で鉄瓶の製造に従事するのは、茶釜を作っている釜師と鉄鋳物を生産する職人で、10名にも満たない。

現代の茶道では、鉄瓶は盆略点前の道具として使われている。

まとめ

湯沸かしに注ぎ口と取っ手が付いた道具は、日本では薬用用途として13世紀頃から存在していた。これが「鉄瓶」と名付けられたのは江戸後期で、茶道家元の要望によって茶の湯釜よりも手軽な道具として作られた。その後、茶の淹れ方の変化や生活道具の変化により、庶民の日常的な生活用品となった。これは昭和時代まで続いたが、代替品が現れたことで日常生活では使われなくなり、現代では茶道の道具として作られ、使われている。

3. 中国の喫茶文化

現代の喫茶文化

上海の街中には、茶葉を販売する店、喫茶店などが数多く存在するだけでなく、茶とは無関係のものを販売する店舗にもお茶を提供する設備がある場合もある。国際見本市でも、小さなブースに商談コーナーなのか喫茶スペースが設けられていた（写真1）。日本に比べて、喫茶がより重要で、人間関係や社交の場において欠かせない文化であるように感じられる。

上海で訪れた茶館は、有料で喫茶を提供していた。（写真2）給仕の20代女性性は、3年間中華茶芸の専門学校で学び、講師の職に2年間従事したという。説明によると、中国では状況に合わせて茶葉を選ぶ。例えば食後であれば「油っぽさを取り消化に良く、口中を爽やかにするお茶」、女性には「女性ホルモンに良い紅茶」という具合だ。飲み方は、杯を三指で持ち、まず目で見る。次に香りをかいで雑味がないか確認する。そして喉を通して味を見る。日本の茶道についても知識があり、「抹茶はお菓子の甘さと苦みのマッチングを楽しむ。それに対して茶芸では、水と茶葉のマッチングを味わう」と説明された。これは日本の喫茶習慣とはずいぶん違うように感じられる。日本の茶道では、茶会は参加者が時間を共有するための場、席主のもてなしを楽しむ場であり、茶そのものを味わうことは主目的ではない。また日常においても、数種類の茶葉を効能や味などで選ぶことはあるにしても、飲み方として視覚（色を見る）、嗅覚（香りをかぐ）、触覚（喉を通す）、味覚（味わう）と五感を駆使することはないし、

「水と茶葉のマッチング」を意識して水を用意することもない。中国の喫茶文化では、喉を潤すだけでなく、薬膳のような身体的効能と、五感で楽しむ、「茶と向き合う」という面があることが分かる。

歴史

茶は、周代(紀元前 1050 頃～前 256 年)から飲料、薬として服用されており、唐代(618～907 年)には一大文化となった。陸羽が記した『茶経』(758 年)は、10 章 3 卷からなる茶に関する最古の書物で、茶の歴史や喫茶の実技を紹介するだけでなく、精神性をも記している。酒宴の代わりに茶と菓子を振る舞う「茶宴」、品茶(茶を美味しく飲む)を楽しみ、詩歌を作り、楽器や将棋に興じ、花鳥風月を愛でる「文人茶会」が盛んになったのも同時代である。陸羽を含む文士らは、「書を著し、茶事を広め、銘茶を品評し、水を探求し、茶会や茶宴の形式を定めるなど、茶法の格式や段取りを決めていった」[陸, 2008]。宋代(960～1279 年)には一般庶民にも茶会の習慣が広がり、茶葉の品質の優劣を競う「闘茶茶会」や、茶を点て芸を楽しむ「点茶遊芸」、客を茶でもてなす「客来敬茶」などが生まれた。浙江省の天目山径山寺の「径山茶宴」は後の日本茶道に大きな影響を与えた。

中国と日本の喫茶の歴史と文化的な意味を論じる陸留弟は、中国の喫茶について次のように述べている。

中国の茶芸は儒教思想をその核に置きながらも、道教と仏教にも融合しながら発展して来た。陸羽は真の茶芸を究めるために、厳格な規則を作ってそれに従うことを好しとし、二四種の器のうち一つでも欠けてはいけないとした。これは茶によって倫理と秩序を明らかにする儒教の思想を発揚するため、茶にはまず「茶の礼儀」が必要であるという主旨であった。また陸羽は山野や林などで茶を飲む時はそれほど規則に縛られずともよいとし、楽しむことは儒教思想の二番目の主旨であるということから茶による遊び、「茶芸」の効果を宣伝した。儒教に対して、仏教から派生した禅宗の宗教哲学の概念が日常生活の物事に浸透していく中で、「茶道」思想が形成されるようになった。道家隠者の茶道は空虚の美や空霊の美を主張する。道教の茶芸の境地とは、大自然の中で水にこだわって茶を淹れ、山水に思いを馳せて、天地と冥合することなのである。隠者の茶は現実を超越して自然に帰るとい

優雅の深き茶を追い求めるものである

(p26) [陸, 2008] (引用者注:「茶芸」の語は原文ママ)

中国の喫茶文化は身体療養から始まり、既に唐代には厳格な規則が生まれたものの、「楽しむこと」もまた主旨とされている。「美味しく茶を淹れる方法」が追求されると同時に、宗教哲学と結びつき、喫茶が喉を潤す以上の精神的な意味を持つ場合もあることが分かる。

茶芸

上記引用文では「茶芸」という言葉が用いられているが、「茶芸」は、日本の「茶道」、韓国の「茶礼」と区別するため、「台湾茶文化を表す語」として 1977 年に発表された語である [陸, 2008]。Ke は、現代東アジアの茶文化像を解明することを目標に、中国、台湾、日本の茶文化を比較研究する中で、以下を指摘している [Ke, 2010]。

1. 「台湾の茶芸が日本占領期の茶道の影響を色濃く受け継いでいる」こと
2. 「台湾では 1970 年代以降に文化、芸術が重視される風潮が高まり、中国から伝来された茶文化を基礎に変化して、独特な台湾茶芸文化が成立」したこと
3. 中国は茶の起源であり長い歴史を持つが、「1966 年に文化大革命が着手されると、中国における茶文化は次第に衰退」したこと
4. 「1970、80 年代になると、経済改革、対外開放の推進によって、台湾の茶芸が正式に導入」されるようになったこと

日本占領時代（1895–1945）のある時期には 9 流派の先生が台湾におり、「日本茶道の作法、流派、思想など」が伝えられ、台湾の喫茶文化に浸透していった。日本茶文化の精神性ととともに受け入れられた茶道具は、中国式のものと影響しあい、改良タイプ、導入タイプ²、導入後に機能転換したタイプの 3 タイプを含む台湾独自の茶道具が形成された。そして中国では、文化大革命で中断した喫茶文化が「80 年代に中国は台湾から茶芸が逆輸入されて、清朝の時代に形成された工夫茶と結びついて娯楽性が高い茶文化が発展」したという。

「茶芸」の語と概念は、台湾では 90 年代の茶芸館ブームを経て一般化した。台北では、日本占領時代の建築物を再利用した茶芸館が今でも人気である。(写

² 写真 3 の右奥の風炉と釜は、Ke の指摘する「導入タイプ」にあたる。日本の道具が優れた形として台湾の茶人にも受け入れられた [Ke, 2010]

真 3, 4)

Keが「茶芸は中、台二つの地域において新しく融和しつつある茶文化のこと」と述べ、陸が「素晴らしい感動を生む精神的享受、「茶」という物質をめぐる多彩な芸術世界を織りなすもの」と定義するように、「茶芸」の語はすでに 1977 年当時の「台湾独自の茶文化」の意味を離れている。陸が中国喫茶文化の歴史をひもとく際に「茶芸」の語を用いていることから示されるように、「茶芸」は中国の喫茶の歴史、日本の茶道に影響された台湾の喫茶文化、それを逆輸入し新しく生まれた現代中国の喫茶文化を内包している。

茶芸師

「茶芸」の語は、中国、台湾文化圏での喫茶にまつわる文化的活動、社交、精神的肉体的充足などを包括した概念を作るとともに、多様な喫茶文化をある程度整理・分類し形式化することにつながった。

中国本土では 1999 年、中国労働及び社会保障部と中国茶関係の学者らによって「茶芸師国家職業基準」が提案された。中国茶と中国茶芸において一定レベルを保ち、茶芸館に従事するための国家検定制度として、高級茶芸技師、茶芸技師、高級茶芸師、中級茶芸師、初級茶芸師の 5 段階が設けられ、2002 年春、第 1 回認定試験を行った [陸, 2008]。

初級茶藝師の場合、以下の項目を習得する必要がある。1. 茶藝師職業倫理、2. 茶業概況、3. 中国名優茶、4. 茶の包装と保存方法、5. 茶器の識別と使用方法、6. 茶芸について、7. 茶芸技術の実践 [林, 2007]。

中国の多種多様な茶葉（緑茶、紅茶、黄茶、黒茶、白茶、青茶（ウーロン茶））と喫茶習慣、「茶芸」の五代要素として神、美、質、均、巧について学び、基礎動作の姿形、姿態、風格、礼儀を訓練し、茶芸館でお茶を供する場合の動作を身につけるよう体系化されている。このような形式化・体系化は形骸化につながり兼ねないが、「修了資格試験は、自分なりの茶席を考案して発表するもの」[陸, 2008]とあり、自由な面があることが注目される。これは、先に引用した儒教思想に基づく「楽しむ」「遊ぶ」考え方の影響、また日本の茶道の影響や台湾喫茶文化をも取り込む寛容さ、懐の深さを示しているように感じられる。

まとめ

現代中国では喫茶には、身体的効能、五感を使って楽しむ精神的効能、社交

の手段という面がある。これは喫茶の長い歴史の中で培われた考え方で、茶は宗教哲学とも結びつき、喉を潤す以上の意味を持つものとされて来た。台湾で作られた「茶芸」という語は本来、中国伝来の喫茶文化に日本の茶道が影響し生まれた「台湾独自の喫茶文化」を指す語であったが、中国、台湾文化圏での喫茶にまつわる文化的活動、社交、精神的肉体的充足などを包括した広い概念となった。90年代には中国において茶芸師の国家資格が作られ、多様な喫茶文化が体系化・形式化されて来ているが、根底に「楽しむ」思想があることもあり、自由度は保たれている。

4. 鉄瓶の文化的意味

先に述べた茶芸師習得技能の「5. 茶器の識別と使用方法」には、道具が詳細に説明されている。鉄瓶は、主茶器 9 用具（茶壺、茶船、茶盤、茶海、茶杯、聞香杯、茶托、蓋置、蓋碗）、補助用品 8 用具（茶巾、茶匙、茶荷、茶則、茶針、煮水器、水盂、茶缶）のうち、補助用具の「煮水器」に含まれ、重要な道具とされていないことが分かる。

上海で訪れた茶館では、日本製の鉄瓶を販売しているものの、喫茶提供にはステンレス製の湯沸かし器を使っていた（写真 5）。

しかし街中の茶用具店には外から見やすい場所に鉄瓶が陳列されているし（写真 6）、スタイリッシュなライフスタイルを提案する店舗でもディスプレイされていた（写真 7, 8）。見本市の商談コーナーにも鉄瓶があった（写真 9）。鉄瓶が好まれる背景には何があるのだろうか。これには中国の喫茶文化に含まれる薬膳的指向と、茶芸の形式化が関係すると思われる。

2013 年の Science Portal China のコラムは、鉄分が身体に良く、日本人の長寿と関係している、鉄瓶で湯を沸かすとお茶に適した湯になるといった効能を指摘している [Zhang, 2013]。中国人にとって茶を飲むことは、1. 養生（味わいの中に趣を求め、それによって自分を見いだすこと）、2. 保健（病気の予防や身体的効能）、3. 社交（集いの場）などの意味を持つ [陸, 2008]。「鉄分が身体に良い」ことは 2. 保健に、「お茶に適した湯になる」ことは 1. 養生に適うと思われる。

茶芸が体系化されたことにより、必要な用具や役割が明確になり、一つ一つに趣向を凝らす傾向が生まれていることも考えられる。約 10 年前から高岡銅器や他産地の鉄瓶を扱う店舗（写真 10）は、茶道具に限らずマイセン、景德鎮、

江戸切子、パイプなどの高級な趣味の物品を扱っている。そこでよく売れるのは18000元（約30万円）ほどの鉄瓶だそうだ。茶海や茶杯といった主用具に凝り、身体的効能を求める指向とも相まって、補助用具の鉄瓶にもこだわるようになってきていると考えられる。

鉄瓶は日本で生まれた道具だが、新しいものを取り入れることが歴史的連続性を損なうと考えられていないことも指摘しておきたい。「茶芸」という新しい語を、中国喫茶の歴史全体を覆う概念として拡張し使用しているように、19世紀日本で生まれた鉄瓶は、今後の喫茶文化に取り込まれていくように思われる。

日本の鉄瓶は、江戸時代に茶道文化から生まれ、茶を淹れるために湯を沸かす道具として昭和前期まで一般家庭で日常的に使われた。その後ヤカンなどの代替品が出現したことで、鉄瓶は「茶道の道具」に戻り、現代でも作られ、使われている。一方日本に喫茶文化をもたらした中国では、日本の鉄瓶を茶芸の文脈で用いている。茶芸では、鉄の及ぼす身体的効能が重視されている。また、道具に凝ることで場に意味を持たせる、社交の一助とする面もある。これは茶芸の形式化がもたらした変化であると同時に、多様な喫茶の習慣を柔軟に取り込む茶芸の寛容さの賜物でもある。鉄瓶は「茶を淹れるために湯を沸かす」という同じ用途に使われていながら、文化的な意味は変容しているといえる。

なお今回の論考では、釜師が制作する高級鉄瓶、高級な古物などは論じなかった。これらは贈答品やアート市場での投機品として、茶芸の「道具」として用いる鉄瓶とは別の意味を持っている。また、「日本の茶道の「道具」」として用いるケースでは、鉄瓶の文化的意味は変容せず、「日本」や「茶道」に対しての意識が存在すると思われる。これらについては今後の課題としたい。

文献目録

- KeYi-hsun. (2010). 東アジア茶文化比較研究 ―日本と台湾の交流と影響―. 国際日本研究(2), 183-212.
- ZhangLu. (2013年12月10日). 【13-12】日本の鉄瓶と中国. 参照日: 2017年3月1日, 参照先: 中国の科学技術の今を伝える Science Portal China: http://www.spc.jst.go.jp/experiences/change/change_1312.html
- 宇野木 忠. (1932). 伯樂 澁澤翁. 東京千倉書房.
- 吉野亜湖. (2013). 草双紙に見る江戸時代の喫茶文化 ―茶の飲み様と道具の変遷―. 71-88.
- 香取秀眞. (1935). 鉄瓶図録. 鐵瓶の會.
- 小山ブリジット. (2006). 夢見た日本 エドモン・ド・ゴンクールと林忠正. 平凡社.
- 松井 宗幸. (2005). お茶のお稽古 茶道入門 すべての所作がやさしくわかる. 成美堂出版.
- 石田旭山. (1887). 京都名所案内図會. 玉宝堂.
- 中野俊雄. (2005). 茶の湯釜と鉄瓶の歴史と替底方法. 鑄造工学, 77 (2), 114-121.
- 養田 実, 定塚 武敏. (1988). 高岡銅器史. 高岡銅器協同組合.
- 陸留弟. (2008). 茶芸と茶道における諸要素 ―中国茶芸の歴史、文化、習慣、特徴と日本茶道の型・気・美・禅.
- 林聖泰. (2007). 中国茶藝師 I. DTP 出版.
- 鈴木香代. (2016). 二十四節気の中国茶席のしつらえ. 優しい食卓.



写真1 国際見本市での小さなブースの商談コーナー



写真2 上海の茶館

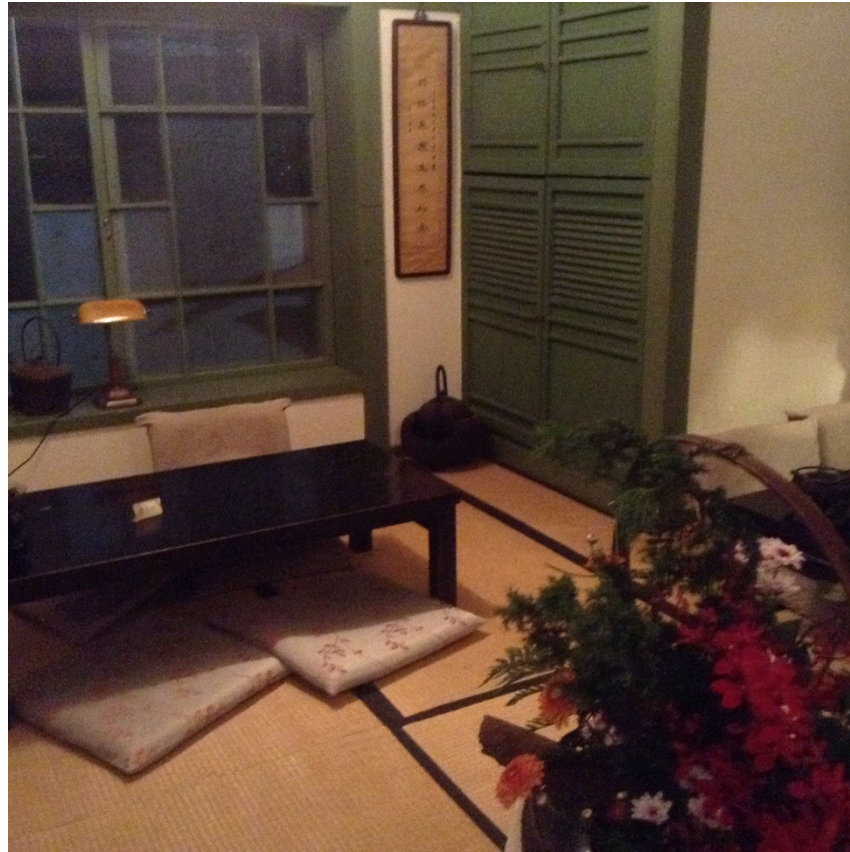


写真3 台湾の日本の建物を再利用した茶館
右奥に風炉と釜が置かれている。



写真4 台湾の日本の建物を再利用した茶館



写真5 ステンレス製の湯沸かし器



写真6 茶用具店のウィンドウディスプレイ



写真7 上海のスタイリッシュな店舗
中国茶用の茶器とともに鉄瓶が並べられている。



写真8 ヨーロッパ系アパレルブランドが中国の伝統工芸をリ
デザインし提案する店舗



写真9 見本市の商談コーナーの鉄瓶



写真10 高級な趣味品と共に鉄瓶を取り扱う店舗